

# 陸機の文賦と「文学」の自立

渡 邊 義 浩

## はじめに

曹操は、旧来の価値観の中心にあった後漢「儒教国家」が崩壊したのち、新たな文化的価値基準として「文学」を創出し、国家的宣揚と五官将文学の設置などによる制度化を行った。<sup>(1)</sup> その子である曹丕は、『典論』論文篇に、「文章は經國の大業にして不朽の盛事なり」と述べたが、これは青木正児が評するよう<sup>(2)</sup>な、「文学を卓然独立せしめんと欲する抱負を示した」ものではない。「不朽の盛事」たり得る「文章」は、君主の「一家の言」を指し、立言の不朽は立徳・立功に次ぐとする『春秋左氏伝』の規定を超越するものではなかったのである。<sup>(3)</sup>

したがって、弟の曹植も、「辭賦は小道」であると「楊徳祖に與ふる書」に記した。「辭賦は小道」という言説は、単なる建前ではなく、曹植を規定している儒教の強さの表

れである。それを踏まえた上で曹植は、あえて「辭賦は小道」と言い切ることで、自身の辭賦が直接的には立徳・立功・立言に結びつかない仮構であること、嗜好性や虚構を包むものであることを示した。ここに「文学」は、表現の追求を第一義とすることを許された。こうした意味で、曹植は近代的な意味における自覺的な文学の表現者と位置づけられるのである。<sup>(4)</sup> しかし、かかる曹植の自覺が、「文学」独自の価値が儒教に匹敵するとの主張に展開することはなかった。

それでは、「文学」は儒教と対等な価値を持つと自覺したうえで、儒教からの「文学」の自立が宣言されることはなかったのだろうか。本稿は、それを陸機の「文賦」に求めるものである。

## 一、賦と玄学

陸機の文賦は、文学理論を論ずる文章でありながら、有韻の文である賦の形式を用いるところに第一の特徴がある。興膳宏によれば、こののちも白居易の「賦賦」や司空図の「二十四詩品」など少数の例外を除けば、賦による文学理論に類例はなく、陸機の文賦は六朝前半の文学理論中で最も独創的かつ最も価値の高い作品である、という。文賦は、換韻により二十の節に分けられているが、文賦を著す理由を述べた序文の後の第一節は、文章を著そうとする「意」（創作意志）の契機を次のように説明する。

中區に佇みて以て玄覽し、情志を典墳に頤ふ。四時に遡ひて以て逝くを歎き、萬物を瞻て而て思ひ紛る。落葉を勁秋に悲しみ、柔條を芳春に喜ぶ。心は懷懷として以て霜を懷ひ、志は眇眇として而て雲に臨む。世徳の駿烈を詠じ、先人の清芬を誦す。文章の林府に遊び、麗藻の彬彬たるを嘉す。慨として篇を投じて筆を援り、聊か之を斯文に宣ぶ。

注（六）に掲げる原文に示したように、第一節は六字句で構成され、偶数句ごとに押韻する。「意は物に稱はず、文は意に逮ばない」（創作意志が対象と連動せず、表現が

創作意志に及ばない）理由を「能くすること（表現能力）の難しさに求めた序文を受け、第一節は「意」の生まれ方を説明する。その際、「典墳」（三墳五典、聖人の古典）を学ぶことと、「文章」・「麗藻」（文学作品）を読むことは、「意」の生まれる契機として同列に置かれている。これは、儒教からの「文学」の自立を宣言するのに相応しい儒教經典の扱いである。また、それと並んで自然の移り変わりにその契機を求めることも、「詩言志」の伝統にはそぐわない。陸機が文学理論を賦という表現形式で書いた内的な要因は、有韻の文章の重視にある。陸機が「論」などの無韻の文章よりも、有韻の文章を重視したことは、後述する文体論の分析により明らかとなるう。

また、陸機が賦で表現する外的な要因は、陸機の恩人である張華の出世作が「鶴鵠賦」であることに求められる。旧孫呉臣下として、中原の貴族から蔑視された陸機は、張華に高く評価され、その庇護のもと文学の才能により、西晋に徐々に地歩を築いていった。張華は、牧羊より身を起こし、その卓越した文化的価値を劉放・阮籍・盧欽に評価されて貴族となった。そうした人生の軌跡が、陳寿など旧蜀漢出身、陸機など旧孫呉出身、あるいは寒門・寒人出身ではあるが、高い文化的価値を持つ者を拔擢する態度へと

つながった。<sup>(9)</sup> 同時期における賈誼の「二十四友」が強い政治的指向により結びついていたことに對して、張華は文化的価値を中核に置く集団を形成していた。<sup>(10)</sup> その張華が、阮籍より「王佐の才」との評価を受けたのは、「鷦鷯賦」を著したことによるといふ。<sup>(11)</sup> 陸機が、四十歳前後に書いたと推測される文学理論を賦という文体で著したことには、張華の出世作からの影響が外的要因としてあると考えてよい。さらに、陸機が賦という形式を取った理由を曹植が「辭賦は小道」とすることへの反発に求めてもよい。文賦の文体論は、曹丕の『典論』論文篇を踏まえ、それを覆すことで自らの議論を展開している。弟曹植の文学論も意識していたと推測することは許されよう。漢代以来、賦は「小道」などではなく、「文学」を代表する表現形式であった。陸機は自らの代表作となる「文賦」を最も正式な文体で表現したのである。<sup>(12)</sup>

陸機の文賦の第二の特徴は、表現の典拠を玄学に求めるところにある。すでに掲げた序文の「意は物に稱<sup>かな</sup>はず、文は意に逮<sup>およ</sup>ばず」は、『周易』繫辭伝の「書は言を盡くさず、言は意を盡くさず」を踏まえている。小尾郊一は、この記述の背後に清談の論材として取りあげられていた「言不盡意」論を置き、それが才性論<sup>(13)</sup>に含まれている、とする。林

田愼之助は、これを批判的に継承して、曹丕の『典論』論文は才性論を現実の文壇に活用し建安七子の文才批評を行ったが、陸機は才性論に触発されて文学のより根源的な課題である文学創造の内的工程の分析に取り組んだ、と文賦を評している。本稿の問題関心から言えば、揚雄以来、儒教経典を典拠とするようになっていた賦<sup>(14)</sup>が、典拠の求め方においても儒教から自立したことを重視したい。

陸機の文賦が玄学を典拠とする外的な要因もまた、張華に求めることができる。注(九)所掲林田論文によれば、張華は、多様な作風を持つが、賦では老莊的気風を見せる。阮籍に評価を受けた張華は、「鷦鷯賦」の中で『韓非子』説難の論理にのせて、一切の対象を相對化し、それなりの存在の中で自足安住をはかる老莊的小宇宙の思想を展開した、といふ。<sup>(15)</sup> 陸機は賦という形式だけではなく、その典拠を玄学に求める表現方法もまた、張華の影響を受けているのである。

陸機が玄学を文賦の典拠とした内的必然性は、儒教から「文学」を自立させようとする意図に求められる。その価値を尊重しながら儒教的文学観から自立するためには、儒教を否定して文学を独立させるのではなく、前近代中国全体に続く儒教的規制力のもとで「文学」の自立を宣言する

必要があった。そのためには、儒教のもとで老莊思想を再編した玄学を典拠とすることは有効である。何晏・王弼から始まる玄学を典拠とすることで、陸機の文賦は儒教からの「文学」の自立を目指したのである。

それでは、儒教的文学観を代表する「詩言志」は、文賦においてどのように位置づけられたのであろうか。文賦の第二節以降の主張を検討していこう。

## 二、言志から縁情へ

陸機の文賦の第二節は、胸中に想像力を巡らし、ことばを紡ぎ出す方法が述べられる。ここでも、「六藝」という字句で「六經」を表現しているが、それが特別扱いされることはない。「六藝」は、構想を練る中で、「羣言」（あまたの書物）と並び読まれる対象に過ぎない。ここでも儒教經典は、「文学」作品と並列に扱われているのである。

第三節は、ことばを表現に定着していく過程が述べられ、第四節は、表現が何もないところから創作される重要性を説く。

伊れ茲こゝの事の樂しむ可き、固より聖賢の欽しんふ所なり。

虚無こゝろに課して以て有を責め、寂寞を叩たたきて而て音を求む。

「虚無に課して」（無に働きかけて）「有」を求めるという発想は、『莊子』郭象注が成立する以前に唱えられていた。王弼の「無」と「有」の理解に基づく。王弼の「無」は、『老子』本来の主張とは異なり、「無」から「有」が生まれるという直接的な可能性は取り去られている。王弼の「無」は「有」を直接生み出すことはないが、それを存在させる根源者として、理念的・論理的に設定されたものである。表現活動で言えば、対象に何らかの働きを加えて表現が生まれることを「無」が根源者として存在させる、という理解になる。したがって、表現活動は、現実そのものの描写ではなく、現実を対象化し、それを表現していく想像力が重視されることとなる。ここに陸機は、曹植が自覚した文学のための仮構を継承し、その創作の内的方法を論ずるに至ったのである。

また、「虚無に課して」「有」を求めることを「寂寞を叩きて」「音」を求める状況に譬えることも興味深い。「寂寞」Ⅱ「無」そのものから「音」Ⅱ「有」が生まれるのではなく、「寂寞」Ⅱ「無」を根源に置きながら、そこに「叩く」という働きを加えることにより、「音」Ⅱ「有」が求められることをよく説明できているからである。後述するように、陸機は表現における音律の存在を重視していた。音



律への注目が「無」と「有」の理解を表現しやすくしているのである。

第五節は、『文章流別志論』や『文心雕龍』に継承されていく文体論が展開される。

詩は情に縁りて綺靡なり、賦は物を體して瀏亮たり。碑は文を抜いて以て相質なり、誄は纏綿として悽愴なり。銘は博約にして温潤なり、箴は頓挫して清壯なり。頌は優遊して以て彬蔚なり、論は精微にして朗暢なり。奏は平徹にして以て閑雅なり、説は焯曄にして譎詭なり。<sup>23)</sup>

陸機は、十種の文体を取りあげ、その創作法の一語を提示する。文の並び順は、その文体の重要性を示すが、「詩」「賦」「碑」「誄」「銘」「箴」<sup>23)</sup>「頌」の有韻の文が先に掲げられ、無韻の「論」「奏」「説」はその後に附されている。これに対して、曹丕の『典論』論文篇は、無韻の文を尊重する。

蓋し奏・議は雅なるが宜しく、書・論は理なるが宜しく、銘・誄は實なるを尚び、詩・賦は麗なるを欲す。

曹丕は、八種の文体を二組ずつ、「奏・議」「書・論」という無韻の文から、「銘・誄」「詩・賦」という有韻の文へと並べる。陸機が『典論』論文篇の無韻の重視を覆して、

有韻の文を無韻の文より重視していることが分かる。注(五) 所掲興膳論文は、これを文章の社会的効用を重んずる曹丕から、唯美的な感覚を尊ぶ陸機へと、時代の好尚が変化していたことを物語る、とする。「時代の好尚」であるか否かは疑問が残るが、陸機の意図が唯美的な感覚の尊重にあったことは間違いない。

それは、「詩は情に縁りて綺靡なり」(詩は情をもとにして美しいもの)と述べ、儒教的文学観を代表する「詩言志」と訣別していることに明らかである。曹丕の『典論』論文篇も、「詩・賦は麗なるを欲す」と述べてはいるが、その置かれた場所は八種の文体の終わりであり、「詩」と「賦」をひとまとめにした主張であった。これに対して、文賦は、「詩言志」と対になる表現である「詩縁情」を単独で、しかも筆頭に掲げることにより、「詩言志」との訣別を高らかに宣言している。ここに詩は「志を言ふ」叙事詩から、「情に縁り」そう抒情詩へと大きく展開するのである。

また、文体の種類が八種類から十種類へと増加したことは、表現することの意義を拡大する意味を持つ。儒教經典が説くように、采詩官が政情調査のために集める「詩」だけが「文学」なのではない。上位に置くべき有韻の七種の文体に止まらず、無韻の三種の文体をも含めて、多くの文

体が「文学」の対象なのである。

続く第六節から第十五節までは、創作に関する技術的な問題を様々な角度から論ずる。それは、「詩言志」との訣別が、新たな表現の創作方法の提示を要請しているためである。『尚書』舜典の「詩言志」を受けた『毛詩』大序は、詩の創作方法を次のように説明している。

詩なる者は志の之く所なり。心に在るを志と爲し、言に發するを詩と爲す。情中に動きて、言に形はる。之を言ひて足らず、故に之を嗟歎す。之を嗟歎して足らず、故に之を永歌す。之を永歌して足らず、手の之を舞ひ、足の之を蹈むを知らざるなり。<sup>25</sup>

『毛詩』大序は、詩は人間の「志」が動いてできるもので、心の中にあるときは「志」であるが、言葉に表現されると「詩」となる、という。もちろん、「情中に動きて、言に形はる」と述べられるように、ここには「情」が「志」と不分明な形で含まれており、「詩言志」を非抒情の主張と言いつけることはできないし、言志詩がすべて叙事詩なわけでもない。それでも、創作論としてはきわめて原初的であり、陸機は表現者として、これに満足できなかった。「言志」と訣別して「縁情」の詩の創作を主張する以上、かかる儒教的文学観とは異なる具体的な創作方法を提示するこ

とは、陸機の義務ですらあった。<sup>(26)</sup>

### 三、美刺から衆理へ

陸機の「文学」の創作方法が具体的に語られる第六節から第十五節までのうち、第六節は、「音聲」（音調）について、文は音調が調和すべきことを述べる。第七節は、「繩」（条理）について、文は一貫した条理を通すべきことが説かれ、そのために内容・表現の無駄を省くべきことが主張される。第八節は、「警策」（秀句）について、「片言」（ごくわずかな言葉）を用いて文に鮮明さを加えるものであるとする。第九節は、「曩篇に合ふ」場合の対応を述べ、ブライオリティを尊重すべきことを説く。どんなに美しい表現でも、「曩篇に合ふ」（すでに書かれていた表現と同一である）場合には、その文は必ず棄てなければならないというのである。第十節は、「玉珠」（珠玉の言葉）の重要性を説き、これを得た場合には、たとえ対句が凡庸であっても用いるべきとし、両者の調和のとり方に言及する。第十一節から第十五節は、文の創作で避けねばならない欠陥を「五病」（具体的には①④⑤）と呼んで整理する。第十一節では①「短韻」（短文を綴ること）が、第十二節では②「瘁音」（不健全な文）が、第十三節では③「理を遺て

て以て異を存」する（条理を通さず珍しいことにとらわれる文を書く）ことが、第十四節では④「奔放して以て諧合する（感情の赴くままに調子よく書く）ことが、第十五節では⑤「清虚にして以て婉約」である（あつさりとした簡約な文章を書く）ことが、批判される。

これらの創作方法論の中で注目すべきは、第六節に述べられる、文章に音声上の調和をもたらしすべしとの主張である。

其の物爲るや姿多く、其の體爲るや屢と遷る。其の意に會するや巧を尙び、其の言を遣るや妍を貴ぶ。音聲の迭に代はるに暨びては、五色の相宣ぶるが若し。

逝止の常無く、固に崎嶇として便じ難しと雖も、苟に變に達して次を識らば、猶ほ流れを開いて以て泉を納るるがごとし。如し機を失ひて後に會し、恒に末を操りて以て顛に續げば、玄黃の秩叙を謬る、故に渙渢として鮮かならず。

陸機は、文の「音聲」が順次交替していくさまは、あたかも「五色」の糸が多彩色な色調を織りなすようである、と述べている。「五色」は、音律の相對音高である「五音」（宮・商・角・徵・羽）の比喩である。注（五）所掲興膳論文によれば、陸機は「四聲」の存在を明確に知っていた

わけではないが、助字を外した「音聲迭代、五色相宣」が「平平仄仄、仄仄平平」と截然と区別されているように、漢語に四声のトーンが内在する原理を基本的に理解していた、という。

劉歆の三統曆以来、音律は經学の正しさと天文の運行を合理的に支えるものであった。三統曆は、音律が保証する曆法の正しさにより、天の運行に加えて、經書の正しさを証明しようとした。曆にまつわる様々な数値・觀念などを經書と積極的に結合したのである。ところが、三統曆に完成した音律が曆を支える律曆思想は、後漢時代を通じて次第に崩壊する。その結果、儒教から解放された音律に、詩人たちが興味を抱く。韻の配置の「理」をかつて儒教が正しさを求めた音律に探っていくのである。

陸機の恩人である張華は、西晉の世郊廟燕射・鼓吹舞曲の篇章作成に名を連ね、寒門出身ながらその才能を張華に評価された成公綏は、「長笛賦」「嘯賦」「琵琶賦」「琴賦」という一連の音楽賦を著すなど、音律に長じていた（注（九）所掲林田論文）。陸機も、かれらとの交友を通じて、音律を学んだのであろう。それが、陸機の詩賦の対句の構成美を生むとともに、音律を儒教の正しさを支えるものから、「文学」の美しさを裏打ちするものへと展開させてい

ったのである。陸機の音律の重視は、南斉の永明年間（四八三〜四九三年）になつて、沈約らによる四声の諧和を詩作に導入する詩法へと継承されていく。<sup>(30)</sup>

このように陸機の「文学」創作論は、後世にも大きな影響を与えるが、第十六節では、そうした文章作成の機微は、臨機応変で言葉で説明できないと述べられる。その際にも、呂斉の車輪づくりの名人である「輪扁も言ふを得ざる所」であつた、と『莊子』天道篇を典拠とする。文賦が玄学を典拠とすることは、ここにも見られるのである。そして、第十七節では、曹丕の『典論』論文篇でも扱っていた「文章不朽」論が述べられる。

辭條と文律とを普くするは、良に余が膺の服する所なり。世情の常尤を練ばば、前修の淑とする所を識らん。濬く巧心に發すると雖も、或いは吹を拙目に受く。彼の瓊敷と玉藻とは、中原の菽有るが若し。<sup>①</sup> 藁籥の窮まり罔きに同じく、天地と與にして並び育す。此の世に紛囂すと雖も、嗟予が擲に盈たず。挈瓶の屢々空しきを患ひ、<sup>②</sup> 昌言の属ぎ難きを病ふ。故に短垣に蹠蹠し、庸音を放にして以て曲を足す。恒に恨みを遺して以て篇を終ふ、豈に盈を懷きて自ら足れりとせんや。塵を蒙りて缶を叩くを懼れ、顧りて笑ひを鳴玉に

取る。<sup>(31)</sup>

ここでは、文章の不朽が、①「藁籥の窮まり罔きに同じく、天地と與にして並び育す」（ふいこの風が窮まりないのと同じで、へよい文章は）天地とともに残つていく」と述べられている。ふいこの比喩は、『老子』を踏まえており、<sup>(32)</sup>「文章不朽」論もまた、玄学を典拠としているかに見える。ところが、不朽となる文章を生み出すことは難しいと述べる②「昌言の属ぎ難きを病ふ」は、『尚書』益稷篇を典拠としており、「文章不朽」論は、曹丕と同様、儒教の範囲内にあると考えてよい。したがって、文賦の特徴は、曹丕の『典論』論文篇と比較した際には、「文章効用」論にあると言えよう。

陸機の「文章効用」論は、情の通塞により、文章は書けたり、書けなかつたりすると述べる第十八節・第十九節に続く、最後の第二十節で展開される。

それまで「文章効用」論を代表するものは、『毛詩』大序の「美刺」説であつた。

情聲に發し、聲文を成す。之を音と謂ふ。治世の音は、安くして以て樂しむ。其の政和すればなり。亂世の音は、怨みて以て怒る。其の政乖けばなり。亡國の音は、哀しみて以て思ふ。其の民困しめばなり。

故に得失を正し、天地を動かし、鬼神を感じしむるは、詩より近きは莫し。先王是を以て夫婦を経し、孝敬を成し、人倫を厚くし、教化を美し、風を移し俗を易ふ。故に詩に六義有り。一に曰く風、二に曰く賦、三に曰く比、四に曰く興、五に曰く雅、六に曰く頌。上は以て下を風化し、下は以て上を風刺す。文を主として譏諫すれば、之を言ふ者は罪無く、之を聞く者は以て戒しむるに足る。故に風と曰ふ。<sup>33)</sup>

『毛詩』大序の「美刺」説は、「美刺」のうち「刺」を強調する。「詩」の「六義」の筆頭である「風」を説明しながら、「詩」が人間の感情や思想を言葉に表現したものであるという。したがって、「詩」には時の政治を賛美したり風刺したりする人々の率直な「志」が反映され、為政者は「詩」によって自らの政治を反省し、天地鬼神も感動して自然現象にその結果が現れるとする。儒教的文学観に基づく文章の効用は、詩による「美刺」の表現で現実政治を批判することに置かれていたのである。

田中和夫によれば、「美」「刺」は、毛伝中には大序・小序にしか見られず、詩序の最終的な作者は、後漢の衛宏の可能性もあるという。儒教經典である『詩経』においても、「美刺」説により文章の効用を説くことは、後漢「儒教国

家」のころから行われるようになったことなのである。「美刺」説により、すべての文章の効用を説明することは、「文学」を儒教に對峙する新たな価値と考える陸機には受け入れ難いものであった。

陸機は、「美刺」説に対して、次のように文章の効用を主張する。

伊れ茲の文の用爲る、固に衆理の因る所なり。万里を恢おほいにして閔かぎり無からしめ、億載に通じて津を爲す。俯しては則を來葉に貽のこし、仰ぎては象を古人に觀る。文武を將に墜ちんとするに濟ひ、風聲を泝ひびざるに宣ぶ。塗遠きとして彌わたらざるは無く、理微かすかとして縊きめざるは無し。霑潤を雲雨に配し、變化を鬼神に象る。金石に被らしめて德廣く、管絃ほふに流して日に新たなり。陸機は、「文の用」(文章の効用)は、「衆理の因る所」(すべての理が依るところ)であるという。王肅により、儒教を貫く真理として探求された「理」<sup>36)</sup>は、儒教經典のみならず、「文」の中にも備わっているというのである。魏晉における思想史の新たな展開を象徴する「理」は、儒教と同様、文学をも貫くと陸機は認識する。ここでは、文学は儒教に従属せず、同格に位置づけられている。「美刺」説に代表される儒教的文学観から「文学」そのものの価値

の自立を宣言した、と位置づけるに相応しい「文章効用」論であると言えよう。

## おわりに

曹操による「文学」の宣揚と、阮籍・嵇康による玄学の導入によって、「文学」に対する儒教の規制力が弱まっていたこと、それが文賦を儒教的な「文学」観から離れた、玄学を典拠とするものにした。もちろん、その内的契機には、「文学」そのものの発展がある。曹丕が『典論』論文篇に展開した八種の文体論に比べて、有韻の序列が高い文賦の文体論は、文学ジャンルの広がりだけではなく、沈約へと継承されていく四声の諧和を詩作に導入する詩法への注目を示す。また、詩の作成方法に内的に踏み込んでいく文賦の文学創作の方法論は、『毛詩』大序の「詩言志」に基づく原初的生成論の超克を示す。「縁情」に基づく抒情詩の創作方法が音律に注目しながら、具体的に提示されたのである。すなわち、陸機の「言志」から「縁情」へという詩の生成論の展開は、詩が叙事から抒情へと表現の重点を移すべきことの宣言である。

そして、陸機が儒教の規制を受ける政治的な立場から自由であったことは、「文学」の効用を高らかに宣言させる

ことになった。皇帝の曹丕・諸侯王の曹植が立言の不朽を説きながらも、その上に立德・立功を置かざるを得なかった儒教の制約を、陸機は受けていないのである。ここに「詩」は、政治を賛美または批判することを目的とした「美刺」説に基づく文学効用論を離れ、「詩」そのものの中に「衆理」を求めるものへと昇華していく。すなわち、陸機の「美刺」から「衆理」へという「文学」の効用論の展開は、現実政治の批判から、「理」の表現として「文学」自身の価値を自立させる宣言なのである。

こうした自立を宣言された「文学」は、『陳書』卷三十四文学伝論に、「夫れ文学なる者は、蓋し人倫の基づく所か。是を以て君子は衆庶と異なる（夫文學者、蓋人倫之所基歟。是以君子異乎衆庶）」と述べられるような、それによって人格を定められるものとされ、科挙の進士科の如き規定力を持つに至る道を歩み始めるのである。

## 注

- (1) 渡邊義浩「三国時代における「文学」の政治的宣揚―六朝貴族制形成史の視点から」（『東洋史研究』五四―三、一九九五年、『三国政権の構造と「名士」汲古書院、二〇〇四年に所収）。



- (2) 青木正児『支那文学思想史』（岩波書店、一九四三年、『青木正児全集』第一巻、春秋社、一九六九年に所収）。
- (3) 渡邊義浩「曹丕の『典論』と政治規範」（『三国志研究』四、二〇〇九年）。
- (4) 渡邊義浩「経国と文章―建安における文学の自覚（一）」（『林田慎之助博士傘寿記念 三国志論集』 三国志学会、二〇一二年）。
- (5) 興膳宏「中国における文学理論の誕生と発展」（『中国文学理論の展開』清文堂、二〇〇八年）。このほか、郭紹虞『中国古典文学理論批評史』（人民文学出版社、一九五九年）は、陸機の文賦を形式主義理論の創始と評している。
- (6) 竹中區以玄覽、頤情志於典墳。邊四時以歎逝、瞻萬物而思紛。悲落葉於勁秋、喜柔條於芳春。心懷慄以懷霜、志眇眇而臨雲。詠世德之駿烈、誦先人之清芬。游文章之林府、嘉園藻之彬彬。慨投篇而援筆、聊宣之乎斯文。（『文選』卷十七 論文陸士衡文賦）。なお、平声の韻字に○、仄声の韻字に●を附した。また、劉運好（校注）『陸士衡文集校注』（鳳凰出版社、二〇〇七年）を参照した。
- (7) 高橋和巳「陸機の伝記とその文学（下）」（『中国文学報』二二、一九六〇年、『高橋和巳全集』一五 中国文学論一、河出書房新社、一九七七年に所収）は、典籍と共に情志の養成に求められる自然は、あくまで宇宙的規模のものでなければならなかった、とする。
- (8) 陸機が中原貴族の蔑視の中で生きたこと、および陸機の孫
- 呉興亡論である「辯亡論」の特徴については、渡邊義浩「陸機の君主観と『弔魏武帝文』」（『漢学会誌』四九、二〇一〇年、『西晋「儒教国家」と貴族制』汲古書院、二〇一〇年に所収）を参照。
- (9) 林田慎之助「魏晉南朝文学に占める張華の座標」（『日本中国学会報』一七、一九六五年、『中国中世文学評論史』創文社、一九七九年に所収）を参照。
- (10) 賈誼の二十四友については、福原啓郎「賈誼の「二十四友」に所属する人士に関するデータ」（『京都外国語大学研究論叢』七〇、二〇〇八年）、「賈誼の二十四友をめぐる二三の問題」（『六朝學術学会報』一〇、二〇〇九年）を、張華の交友関係については、佐藤利行『西晋文学研究―陸機を中心として』（白帝社、一九九五年）を参照。
- (11) 『晋書』卷三十六 張華伝に、「初め未だ名を知られざりしに、鵠鵠の賦を著して以て自ら寄す。……陳留の阮籍之を見て歎じて曰く、『王佐の才なり』と。是れ由り声名始めて著はる（初未知名、著鵠鵠賦以自寄。……陳留阮籍見之歎曰、王佐之才也。由是声名始著）」とある。一方、『文選』李善注に引く臧榮緒『晋書』は、「鵠鵠の賦」の制作年代を張華が中書郎であつた時とするが、そうであれば、阮籍はすでに死去している。それでも、阮籍の父阮瑀が司空軍謀祭酒であつた時、張華の義父劉放は司空軍事であり、張華と阮籍を結ぶ縁はある、と注（九）所掲林田論文はいう。
- (12) 陳正驥、一海知義（訳）「陸機の生涯と文賦制作の正確な年

代」(『中国文学報』八、一九五八年)を参照。このほか、姜亮夫『陸平原年譜』(上海古典文学出版社、一九五七年)ほか、文賦の制作年代に関する議論は多いが、姜劍云『太康文学研究』(中華書局、二〇〇三年)は、永康元(三〇〇)年春の制作であると述べている。

- (13) 牧角悦子『経国と文章―建安における文学の自覚(二)』(『林田愼之助博士傘寿記念 三国志論集』三国志学会、二〇一二年)は、賦という文体は、この時期物を書く人間にとって、自己の才能を世に示す手段として最も多く活用された、と述べている。

- (14) 小尾郊一『陸機の文賦の意図するもの』(『広島大学文学部紀要』二八一、一九六八年)。

- (15) 才性論と玄学、さらには人物評価との関係については、渡邊義浩『「史」の自立―魏晉期における別伝の盛行を中心として』(『史学雑誌』一二二・四、二〇〇三年、『三国政権の構造と「名士」―前掲に所収』を参照)。

- (16) 林田愼之助『「典論」論文と「文賦」』(『九州大学文学部紀要』文学研究 七五、一九七八年、『中国中世文学評論史』前掲に所収)。

- (17) 渡邊義浩『揚雄の「劇秦美新」と賦の正統化』(『漢学会誌』五二、二〇一三年)。

- (18) 羅宗強『玄学与魏晋士人心態』(浙江人民出版社、一九九一年)・孔繁『魏晋玄学和文学』(中国社会科学出版社、一九八七年)は、ともに鶴鶴賦の趣旨は郭象の『莊子注』の見解に

一致するという。これに対して、佐竹保子『張華の文学に見られる「老子」の影』(『日本中国学会報』四九、一九九七年、『西晋文学論』汲古書院、二〇〇二年に所収)は、その論旨の骨格は、『老子』の主張に沿っているとする。郭象注と一致すると言うことはできないが、すべてを『老子』との関わりで説明することも難しい。

- (19) 何晏が始めた玄学が儒教の規制下にあることは、渡邊義浩『浮き草の貴公子 何晏』(『大久保隆郎教授退官記念 漢意とは何か』東方書店、二〇〇一年、『三国政権の構造と「名士」』前掲に所収)を参照。

- (20) 伊茲事之可樂 固聖賢之所欽。課虛無以責有 叩寂冥而求音。(『文選』卷十七 論文 陸士衡文賦)。

- (21) 渡邊義浩『郭象の『莊子注』と貴族制―魏晉期における玄学の展開と君主権力』(『六朝學術学会報』一三、二〇一二年)を参照。

- (22) 詩緣情而綺靡、賦體物而瀏亮。碑披文以相質、誄纏綿而悽愴。銘博約而溫潤、箴頓挫而清壯。頌優遊以彬蔚、論精微而朗暢。奏平徹以閑雅、說煒曄而譎詭。(『文選』卷十七 論文 陸士衡文賦)。

- (23) 注(七) 所掲高橋論文は、陸機が新しく加えた「箴」「頌」の二体は、張華の「女史箴」や陸機の「漢高祖功臣の頌」など、彼自身や周辺の文学者のそのジャンルにおける秀れた成果の事実がある、とする。ここにも、張華の影響が見られるのである。

(24) 蓋奏・議宜雅、書・論宜理、銘・誄尙實、詩・賦欲麗（『文選』卷五十二論魏文帝典論論文）。

(25) 詩者志之所之也。在心爲志、發言爲詩。情動於中、而形於言。言之不足、故嗟歎之。嗟歎之不足、故永歌之。永歌之不足、不知手之舞之、足之蹈之也（『毛詩注疏』卷一周南關雎詁訓傳）。

(26) 注（七）所掲高橋論文は、陸機が文の製作過程そのものに反省の光をあてたこと自体がすでに画期的なことであつた、と評している。

(27) 其爲物也多姿、其爲體也屢遷。其會意也尙巧、其遣言也貴妍。暨音聲之迭代、若五色之相宣。雖近止之無常、固崎嶇而難便。苟達變而識次、猶開流以納泉。如失機而後會、恒操末以纘顛。謬玄黃之秩叙、故渙浥而不鮮（『文選』卷十七論文陸士衡文賦）。

(28) 三統曆に完成する音律が曆を支える律曆思想とその崩壊については、堀池信夫『漢魏思想史研究』（明治書院、一九八八年）を参照。

(29) 後漢における律曆思想の崩壊を描いた『統漢書』律曆志に關しては、渡邊義浩・小林春樹『全譯後漢書』志（一）律曆（汲古書院、二〇〇四年）がある。

(30) 永明時代の「文学」については、網祐次『中国中世文学研究——南齊永明時代を中心として』（新樹社、一九六〇年）を参照。

(31) 普辭條與文律、良余膺之所服。練世情之常尤、識前修之所

淑。雖潛發於巧心、或受歎於拙目。彼瓊敷與玉藻、若中原之有菽。<sup>①</sup>同囊籥之罔窮、與天地乎並育。雖紛囂於此世、嗟不盈於予掬。患挈瓶之屢空、<sup>②</sup>病昌言之難屬。故蹢躅於短垣、放庸音以足曲。恒遺恨以終篇、豈懷盈而自足。懼蒙塵於叩缶、顧取笑乎鳴玉（『文選』卷十七論文陸士衡文賦）。

(32) 『老子』第五章に、「天地の間は、其れ猶ほ囊籥の」ときか。虚うして屈きず、動いて愈々出づ（天地の間、其猶囊籥。虚而不屈、動而愈出）とある。

(33) 情發於聲、聲成文。謂之音。治世之音、安以樂。其政和。亂世之音、怨以怒。其政乖。亡國之音、哀以思。其民困。故正得失、動天地、感鬼神、莫近於詩。先王以是經夫婦、成孝敬、厚人倫、美教化、移風易俗。故詩有六義焉。一曰風、二曰賦、三曰比、四曰興、五曰雅、六曰頌。上以風化下、下以風刺上。主文而譏諫、言之者無罪、聞之者足以戒。故曰風（『毛詩注疏』卷一周南關雎詁訓傳）。

(34) 田中和夫「詩の興について」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』別冊一、一九七五年、『毛詩正義研究』白帝社、二〇〇三年に所収）。

(35) 伊茲文之爲用、固衆理之所因。恢萬里而無閼、通億載而爲津。俯貽則於來葉、仰觀象乎古人。濟文武於將墜、宣風聲於不泯。塗無遠而不彌、理無微而弗綸。配霑潤於雲雨、象變化乎鬼神。被金石而德廣、流管絃而日新（『文選』卷十七論文陸士衡文賦）。

(36) 王肅の「理」については、渡邊義浩「王肅の祭天思想」（『中

国文化―研究と教育』六六、二〇〇八年、西晉「儒教国家」と  
貴族制』汲古書院、二〇一〇年に所収）を参照。

（早稲田大学）